書評

近年のプラトーノフ研究から（動向と潮流）

野　中　　進

ロシア語ロシア文学研究　第47号　抜刷
（日本ロシア文学会，2015）

書評

近年のプラトーノフ研究から（動向と潮流）

野　中　　進

本稿では 2010 年代のアンドレイ・プラトーノフ研究に関して，とくに重要と思われる動向と潮流について，実例を挙げつつ，性格づけを行おうとするものである。

2010 年代に入り，プラトーノフ研究はふたたび盛り上がりを見せている。前もって結論づけるなら，「テキスト校訂学（текстология）が研究全体をリードするなか，作家の〈創作の進化（эволюция творчества）〉が中心問題としてクローズアップされている」と言えよう。この動向の土台になっているのは，モスクワの世界文学研究所（ИМЛИ）のコルニエンコ研究チームを中心とするテキスト校訂学の成果である。プラトーノフの作品と資料（草稿，書簡類）の学術版が刊行され，それが解釈的研究（作家論，作品論）の刷新と深化にもつながっている。また，研究者たちの世代交代と国際交流も進んでおり，プラトーノフ研究全体が成熟期を迎えつつあるように見える。こうした流れの最大の功績者を挙げるなら，世界文学研究所のナターリヤ・コルニエンコ教授であることは異論のないところであろう。

本稿の構成としては，（1）プラトーノフの作品集・資料集，（2）国際会議とその報告論集，（3）モノグラフ類，となる。

（1）プラトーノフの作品集・資料集

2010 年代，プラトーノフの作品集・資料集の編纂と出版は新しい段階に入った。2009−11 年に八巻本の作品集が刊行された（Платонов 2009−2011）。この作品集には初期の詩や論文，また戯曲なども収められているが，それらはこれまで

のテキスト校訂の成果に基づいている（Платонов 2000a, Платонов 2004, Платонов 2006）。この八巻本作品集はプラトーノフの創作の全体像をつかむのにきわめて有用である。より学術的な版としてはПлатонов 2004が第一巻（二分冊）のみで止まっていたが，2015年にはようやく第二巻が公刊予定である。

作家の娘マリヤ・アンドレーエヴナ没後，世界文学研究所が作家のアルヒーフ資料を入手したことにより，アルヒーフ資料の編纂・出版作業も進んだ（Платонов 2009）。第一巻には未完の草稿，妻への書簡などが収められている。この資料集は，上記の学術版作品集と並行して編纂・出版されていき，プラトーノフ研究のもっとも重要な一次資料となるだろう。この資料集の成果に基づいて，作家の書簡集が一冊にまとめられた（Платонов 2014）。書簡の多くは最愛の妻マリヤへのもので，その濃厚な抒情性・私秘性はきわめて独特である。それ以外にも，公的な書簡（たとえば1932年のスターリン宛，1938年のエジョフ宛など）が収められている。これらの書簡は以前にもさまざまな版で発表されてきたが，こうして一冊の本で読めるようになったことは貴重であり，ロシアの読書界でも広く注目を浴びた。各書簡には詳細な注がついており，学術的価値も高い。今後，作家の伝記的側面を論ずるさいに欠かせない資料となるだろう。

（2）国際会議とその報告論集

広く知られるように，ロシアの学界において国際会議の開催とそれに基づく報告論集の出版は大きな役割を果たしている。プラトーノフ研究に関しても同様であり，世界文学研究所の『アンドレイ・プラトーノフの「哲学者の国」』シリーズは第7号まで出ている（Страна философов 2011）。2014年9月に行われた国際会議に基づく第8号も出版予定がある。また，コルニエンコの60才記念論集も出版された（Страна филологов 2014）。これにもプラトーノフに関する最新論文が多く収められている。

これ以外に特筆すべきなのは，2011年5月にゲント大学（ベルギー）で開かれたプラトーノフ国際会議に基づく論集である。これはテーマ別に二つの媒体での出版となった。一つは学術誌 *Russian Literature* でのプラトーノフ特集号で，作家論・作品論が中心である（RL 2013）。もう一つは翻訳と受容をテーマにしたもの

で，単行本の論文集として出た（Дооге 2013）。いずれにおいてもベルギーの若き俊英ベン・ドーゲが中心的役割を果たしている。ちなみに，後者の論集では評者も，韓国の研究者ユン・ヨンスン氏との共著「遠い文化的コンテクストにおける異なった文学受容について：韓国と日本におけるアンドレイ・プラトーノフ」を寄せた（Нонака и Юн 2013）。同じ東アジアといっても，日本と韓国とではロシア文学（とくにソヴィエト文学）の受容史が大きく異なることが分かり，興味深い共同研究であった。

もう一つ指摘すべきは，インターネット上の国際セミナーである。2011 年の発足以来，充実した活動を見せるのが，コルニエンコと並んでプラトーノフ研究をリードしてきたエヴゲーニー・ヤブロコフ（彼はミハイル・ブルガーコフ研究でも著名だが）の主催する「国際プラトーノフセミナー」である（http://platonovseminar.com/）このプロジェクトの特色は，参加メンバーが国際的であることの他に，論文集の公刊をも手がけていることである。2013 年にベオグラードで出版された（上記サイトでも読むことができる）第 1 号は，中編『初生水の海』特集である（Яблоков 2013）。さらに初期作品論を特集した第 2 号も最近出た（Яблоков 2015）。第 1 号の序文でヤブロコフが述べているように，「詩学的問題（поэтологические проблемы）」に主たる関心を向けることが本シリーズの狙いである。ヤブロコフによれば，近年のプラトーノフ研究では詩学的アプローチが勢いを失い，「プラトーノフ研究をテキスト校訂学，伝記研究，作家の創作の歴史的文脈研究のみにまとめるべきだとする声さえ，ときに上がるほどだ」（Яблоков 2013: 5）。評者自身は，プラトーノフ研究の詩学的アプローチの現状をここまで悲観はしない。だが，テキスト校訂学と詩学的・解釈的研究の緊張関係があることは事実だろう。それはロシア学問界の「リアル」としては，テキスト校訂に携わることの多い研究所系の研究者たちと講義や解釈的著述により多くの時間を割く大学系の研究者たちのあいだの緊張関係だとも言える。2010 年代のプラトーノフ研究について言えば，テキスト校訂学が詩学・解釈学をリードしつつも，両者のあいだに創造的・生産的な協働関係があるというのが評者の見立てである。そして，その協働関係の鍵となっているのが「創作の進化」という概念である。

以上の国際会議の他に，作家の故郷ヴォロネシでは 2011 年以降，「プラトーノフ・フェスティヴァル」が毎年開かれている（http://platonovfest.com/）。このフェスティヴァルの特色は，学術会議だけでなく，演劇や音楽などの催しも取り入れた文化イベントとして開催されている点にある。中心的組織者はヴォロネシ大学のタマーラ・ニーコノワとオレーグ・アレイニコフである。ヴォロネシ大学は，かつてはモスクワの世界文学研究所，ペテルブルグのロシア文学研究所と並んでロシアのプラトーノフ研究をリードしていたが，2000 年にエカテリーナ・ムーシェンコ，2005 年にヴラジスラフ・スヴィテーリスキーの両氏を失ってから（後者は日本にも知己が多かった），精彩を欠いた時期があった。だが最近ではふたたび勢いを示している。評者は残念ながらこのフェスティヴァルに参加したことはないが，ロシア国内外から広く参加者を招待しているとのことだ。

（3）モノグラフ

2010 年代は，プラトーノフに関する研究書も注目すべきものが多く出ている。ここではすべてを取り上げることはできない。最近のプラトーノフ研究の動向をよく示していると思われる三冊を簡単に紹介したい。

（A）ハンス・ギュンター『両面から見たユートピア：A. プラトーノフの創造的文脈』（Гюнтер 2012）。ギュンターは全体主義文化研究で著名な研究者だが，プラトーノフ研究でも二十年来，世界をリードしてきた。この本はロシア語で書かれた論文をまとめたものだが，出版以来，ロシアの研究者を中心にたびたび引用されている。反響の理由は，プラトーノフ研究の顕著な流れであるモチーフ分析を行っているからだろう。

本書は，プラトーノフ文学におけるユートピア／アンチユートピアの主題を軸としつつ，さまざまなモチーフ（ここでいうモチーフとは作品内で一定の形式的・意味的機能を担う諸形象を指す）を論じている。たとえば，記憶（第 4 論文），犠牲（第6論文），父親（第7論文），飢え（第12論文），動物（第14論文），障害者（第 15 論文），母親（第 16 論文），黙示録（第 17–19 論文）など，いずれもプラトーノフの読者にはなじみのあるモチーフである。ギュンターはこれらの形象が同時代のソ連でどう用いられていたかを併せて示しつつ，プラトーノフ文

学における機能を論じている。ギュンターは諸モチーフのあいだに強い体系性を作ろうとはせず，それらの相互連関をゆるやかに示すのみである。その結果，本書はプラトーノフ文学のモチーフ小百科のような趣きを呈している。各モチーフの解釈も鋭さや新しさよりはバランスや穏当さにすぐれており，モチーフ分析を行うとき，参照すべき好著となるだろう。

ちなみに, 10 頁程度のロシア語論文を 19 編集めて 200 頁程度のコンパクトな本を作るという方法は参考にすべきだろう。経験者なら知るとおり，外国語で長い論文を書くのは難しい。だがギュンターのような方法であれば，外国人研究者がロシア語の単行本というかたちで研究成果を世界に問うことも夢ではあるまい。

（B）エレーナ・コレースニコワ『アンドレイ・プラトーノフの小さな散文：芸術的定数，公刊の原則』（Колесникова 2012）。コレースニコワはロシア文学研究所でプラトーノフ研究を行っている。同研究所もプラトーノフのアルヒーフ資料を一部所有しており，これまでも重要なテキスト校訂を行ってきた。少し前になるが『土台穴』の学術版がよく知られる（Платонов 2000b）。これには研究所が所有する『土台穴』の草稿の動的転写（динамическая транскрипция）も収められている。作家の執筆過程での表現生成について考える上できわめて興味深い資料である。

今回のコレースニコワのモノグラフは，同研究所が所有するアルヒーフ資料，とくに未完成作品の草稿類を用いて，プラトーノフ文学の進化を論じている。以前は彼の主要作品の校訂が最重要の課題であったが，最近ではその作業が一段落つき，テキスト校訂学者たちも新しい課題とアプローチを求めている。コレースニコワはその点，とくに意欲的だ。未完成作品の草稿類を「小さな散文」として主題化し，1930 年代のプラトーノフ文学の進化の全体図を示そうとしている。断片や題名しか残っていないようなケースも多いのだが，彼女は「作品の分量が小さければ小さいほど，その各部分は意味論的に充溢したものになる」（Колесникова 2012: 164）と，逆転の発想を行う。また，題名のみが残されている作品構想については，「小さな散文の最小限のジャンル的単位」（Колесникова 2012: 193）だとして題名の構造を分析している。たしかに，プラトーノフ作品の題名は『秘められた人間』，『動物と植物のなかで』，『幸せなモスクワ』などよく

知られたものを二三思い出すだけでも，プラトーノフ的文体（比喩の観点から見ても独特なメタファーやメトニミーが用いられている）が息づいている。

コレースニコワの研究がギュンターのそれに比してより今日的だと思われるのは，前者がまさに作家の進化を主題化している点である。ギュンター的なモチーフ分析はしばしば作品世界を静的に提示するきらいがある。実際，プラトーノフは多くのモチーフをくり返して使うので，そうしたモチーフ分析がこれまで多かった。だが，創作の進化のプロセスを捨象して，いわば「永遠の相の下に」見られたモチーフ体系はダイナミズムを犠牲にする。同じモチーフの反復でも，進化のプロセスにおける現象として見れば，〈かたちと意味〉の結びつきは変化していると見ることができるだろう。たとえば，かつて作家によって真剣に示されたモチーフが後になってパロディーの素材となるようなケースである。コレースニコワは「小さな散文」という小ジャンルをアルヒーフ資料から切り出し，主要作品との主題的・構成的相関も併せて考えつつ，まさにそのような分析を行っている。昨今のプラトーノフ研究ではテキスト校訂学が解釈的研究をリードしているという好例である。

こうした研究を行うことはアルヒーフ資料へのアクセスや活用という点で，われわれ外国人研究者にはまだ難しいかもしれない。だが，テキスト校訂学者たちの成果（本書や（1）で紹介したような資料集）を読み込み，それを詩学的・解釈学的アプローチにつなげれば，われわれもテキスト校訂学の成果を生かした研究ができよう。そうした試みの一つとして，僭越ながら拙論を挙げたい（Нонака 2015a）。プラトーノフ研究に関するかぎり，テキスト校訂学の成果はまだ十分に活かされていない宝庫である。

（C）イリーナ・スピリドーノワ『「祖国の空の下で」（A. プラトーノフの戦争散文の芸術的世界）』（Спиридонова 2014）。スピリドーノワはペトロザヴォツク大学の教授であり，ペテルブルグとモスクワ双方と関係を保ちつつ，独自の研究を続けてきた。プラトーノフについての副読本（Спиридонова 2012）も出すなど[1]，近年活発な研究者である。

2014 年に出たモノグラフは，題名が示す通り，プラトーノフが第二次世界大戦（大祖国戦争）時に書いた作品群に関するものである。Спиридонова 2005 に続

く，このテーマに関する彼女の二冊目の著作である。

プラトーノフのいわゆる「戦争もの」はきわめて独特である。愛国と祖国防衛，反ファシズムの世界的連帯に関して直線的に示された主題的側面が，グロテスクな文体・描写と独特に結びついており，評価の難しい作品が多い。適切なアプローチが十分見出されておらず，1920−30 年代の作品群と異なり未開拓の分野である。

スピリドーノワの研究は，草稿・ノート類の活用と並んで，文彩・比喩への着眼という点で注目される。たとえば第 3 章「比喩のイデオロギー」では以下のような分析がある。「引用された例では直喩が支配的であり，メタファーはわずかに一例でしか用いられていない。だが直喩はメタファーと系列関係にあり，比喩の極としてのメタファーの〈芸術的土台（художественная база）〉をなしている。プラトーノフにおいて大人の生活は〈遠い〉子ども時代を通して，メタファー的原理に基づいて，性格づけられている」（Спиридонова 2014: 87−88）；「大祖国戦争時の民衆の重要な芸術的・哲学的性格づけとしての〈子ども時代〉は，プラトーノフにおいて芸術的言説のメタファー的構成原理とメトニミー的構成原理の相互作用の上に成り立っている（前者は形象システムを規定しており，後者は叙述構造の主要原理となっている）」（Спиридонова 2014: 90）。こうした分析はプラトーノフ作品における〈かたち〉と〈意味〉の結びつきを考える上で重要である。

比喩に関して言うと，プラトーノフの文体に対しては比喩分析が有効であり，蓄積もある（Бочаров 1994, Левин 1998, Карасев 2002, Михеев 2003, Нонака 2004, 2005, 2008, 2015a, 2015b）。メタファーとメトニミーに関するヤコブソンの有名な定式（Jakobson 1990）を当てはめると，プラトーノフ作品では二つの比喩系列が複雑で緊張した関係をなしている。研究者によって，また扱う作品・時期によって，どちらの比喩系列に重きを置くか違いがある。たとえば『チェヴェングール』では直喩の役割が支配的であるが，『土台穴』では直喩はほとんど用いられない。代わりにメトニミーが中心的役割を果たしている。ここでも〈創作の進化〉の観点が役に立つ。つまり，二つの比喩系列の相関を見ることで，作家の進化をモデル化できるかもしれない。たとえば拙論で論じたように，妻マリヤへの

手紙や初期作品（とくに叙情詩）を読むかぎり，プラトーノフの〈本来〉の比喩はメタファーであると考えられる（Нонака 2015a）。もしそうであるなら, 1920 年代の彼の作家としての驚異的な進化は，少なくとも比喩レベルでは，メトニミーの発達とメタファーとの相関の問題として論じられるだろう。

スピリドーノワもいくつかの比喩への注目を通じて，プラトーノフの創作の進化を描き出そうとしている。それだけ目指される作家像がダイナミック（動的，生成的）になっている点が 2010 年代のプラトーノフ研究の趨勢を表わしている。

以上，駆け足になったが，近年のプラトーノフ研究において重要と思われる動向と潮流について考えるところを述べた。今後も新しい流れが生まれてくるだろう。注意して見守るとともに，自分たちもその流れに加わっていきたい。

注

1 今回，節を立てて論じられなかったが，プラトーノフ研究の第一人者たちによる良質な副読本（なかにはモノグラフというべき水準のものもある）が出ていることも近年の傾向と言えよう（Seifrid 2009, Дужина 2010, Роженцева 2014）。

Литература

Бочаров 1994 – *Бочров С. Г.* «Вещество существования»: Выражение в прозе // Андрей Платонов: мир творчества. М.: Современный писатель, 1994.

Гюнтер 2012 – *Гюнтер Х.* По обе стороны от утопии: контексты творчества А. Платонова. М.: Новое литературное обозрение, 2012.

Дооге 2013 – *Дооге Б. В., Лангерак Т., Яблоков Е. А. (ред.)* Возвращаясь к Платонову: вопросы рецензии: сборник статей. СПб.: Дмитрий Буланин, 2013.

Дужина 2010 – *Дужина Н. И.* Путеводитель по повести А. П. Платонова «Котлована». Учебное пособие. М.: Издательство Московского университета, 2010.

Карасев 2002 – *Карасев Л. В.* Движение по склону: о сочинениях А. Платонова. М.: РГГУ, 2002.

Колесникова 2012 – *Колесникова Е. И.* Малая проза Андрея Платонова: художественные константы. Принципы публикации. СПб.: СПГУТД, 2012.

Левин 1998 – *Левин Ю. И.* Избр. труды. М.: Языки русской культуры, 1998.

Михеев 2003 – *Михеев М.* В мир Платонова через его язык: предположения, факты, истолкования, догадки. М.: Изд. Московского университета, 2003.

Нонака 2004 – *Нонака С.* Силлепсис в «Котловане» Платонова // Творчество Андрея Платонова. Кн. 3. СПб.: Наука, 2004.

Нонака 2005 – *Нонака С.* Повтор сравнений в «Чевенгуре»: к постановке вопроса // «Страна философов» Андрея Платонова: проблемы творчества. Вып. 6. М.: ИМЛИ РАН, 2005.

Нонака 2008 – *Нонака С.* Категориальная ошибка как стилистический принцип Платонова («Котлован») // Творчество Андрея Платонова. Кн. 4. СПб.: Наука, 2008.

Нонака 2015a – *Нонака С.* Противостояние лиризма и антилиризма как момент эволюции творчества А. П. Платонова («Однажды любившие» и др.) //*Яблоков Е. А.(ред.)* Поэтика Андрея Платонова. Сборник 2. Новые территории. М.: Совпадение, 2015.

Нонака 2015b – *Нонака С.* Ситуативное сравнение в «Чевенгуре» А. Платонова // Зборник Матице српске за славистику, № 87. 2015 (в печати).

Нонака и Юн 2013 – *Нонака С.*, *Юн Юнсун.* К вопросу о разном восприятии литературы в далеком культурном контексте: Андрей Платонов в Корее и Японии // Возвращаясь к Платонову: вопросы рецепции. СПб.: Дмитрий Буланин, 2013.

Платонов 2000a – *Платонов А. П.* Записные книжки. Материалы к биогрфии. М.: ИМЛИ РАН, Наследие, 2000.

Платонов 2000b – *Платонов А. П.* Котлован. Текст, материалы творческой истории. СПб.: Наука, 2000.

Платонов 2004 – *Платонов А. П.* Сочинения. Научное издание. Сост. Н. В. Корниенко. Т. 1. Кн. 1−2. М.: ИМЛИ РАН, 2004.

Платонов 2006 – *Платонов А. П.* Ноев ковчег: драматургия. М.: Вагриус, 2006.

Платонов 2009 – Архив А. П. Платонова. Научное издание. Сост. Н. В. Корниенко. Кн. 1. М.: ИМЛИ РАН, 2009.

Платонов 2009−2011 – *Платонов А. П.* Собрание: в 8 т. Сост. Н. В. Корниенко. М.: Время, 2009−2011.

Платонов 2014 – *Платонов А. П.* «...я прожил жизнь»: Письмо. 1920−1950 гг. Сост. Н. В. Конниенко и др. М.: АСТ, 2014.

Роженцева 2014 – *Роженцева Е. А.* А. П. Платонов в жизни и творчестве. Учебное пособие. М. М.: Русское слово, 2014.

Спиридонова 2005 – *Спиридонова И. А.* «Внутри войны» (Поэтика военных рассказов А. Платонова). Петрозаводск: Издательство ПетрГУ, 2005.

Спиридонова 2012 – *Спиридонова И. А.* Творчество Андрея Платонова: проблемы интерпретации художественного текста. Учебное пособие. Петрозаводск: Издательство ПетрГУ, 2012.

Спиридонова 2014 – *Спиридонова И. А.* «Под небесами Родины» (Художественный мир военной прозы А. Платонова). Петрозаводск: Издательство ПетрГУ, 2014.

Страна философов 2011 – «Страна философов» Андрея Платонова: проблемы творчества. Н.

В. Корниенко (ответственный ред.). Вып. 7. М.: ИМЛИ РАН, 2011.

Страна филологов 2014 – «Страна филологов»: проблемы текстологии и истории литературы. К юбилею члена-корреспондента РАН Н.В. Корниенко. Сборник научных статей. М.: ИМЛИ РАН, 2014.

Яблоков 2013 – *Яблоков Е. А.(ред.)* Поэтика Андрея Платонова. Сборник 1. На пути к «Ювенильному морю». Бедград: Издательство филологического факультета, 2013.

Яблоков 2015 –*Яблоков Е. А.(ред.)* Поэтика Андрея Платонова. Сборник 2. Новые территории. М.: Совпадение, 2015.

Jakobson 1990 – Jakobson, Roman. “Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances,” in Roman Jakobson, *On Language.* Cambridge: Harvard University Press.

RL 2013 – *Russian Literature*, LXIII (2013) I/II.

Seifrid 2009 – Seifrid, Thomas. *A Companion to Andrei Platonov's The Foundation Pit*. Boston: Academic Studies Press, 2009.